

第二部 第1巻～第3巻

石川 巧

1 はじめに

江戸川乱歩は、欧米における最先端のミステリーをいち早く吸収し、犯罪学、法医学、性科学、心理学をはじめとする隣接諸科学の知見を取り入れることに積極的な作家だった。彼が生涯に蒐集した文献は和書 13,000 冊、洋書 2,600 冊、雑誌 5,500 冊にのぼる。また、乱歩は夥しい文献を駆使して小説の新しい着想や斬新なトリックを生み出す学者肌の作家であると同時に、自作の構想、執筆過程のメモ、自作に関連する記事を徹底的に整理・保存するマニアでもあった。彼にとっての資料や記録は人生の証そのものだったのである。

膨大な自筆資料、自作資料のなかでも特に重要な資料と考えられるのが『貼雑年譜』と題された全 9 巻の自作スクラップブックである。『貼雑年譜』は、先祖の記述や祖父母の筆跡にはじまり、それまでに住んだ多くの家の記録、少年時代の日記や同人誌、作家になってからは新聞広告や批判記事まで、自分についての情報を集め、貼り込んだものであり、作家・江戸川乱歩こと平井太郎の自分史であると同時に、日本の探偵小説の歴史をひとりの作家の視点で分析、考察した記録集にもなっている。過去の出来事を掻き集め、スクラップブックというかたちで再現しようとする欲望の主体は作家・江戸川乱歩だということである。したがって、本解題では記述主体を「平井太郎」ではなく「乱歩」とよぶ。

『貼雑年譜』は、全 9 巻のうち第 1 巻と第 2 巻のみ復刻されている。ひとつは、江戸川乱歩推理文庫をシリーズ化した講談社が企画し、同文庫の特別補巻として出版されたモノクロ版『江戸川乱歩 貼雑年譜』（定価 3,000 円、台紙に貼り切れない冊子物や書簡類は復元が困難なため割愛された）。もうひとつは 2001 年 3 月に東京創元社が 200 部限定で出版した『江戸川乱歩 貼雑年譜 完全復刻版二分冊』である。東京創元社版に解説「『貼雑年譜』とは」を寄せた戸川安宣は、「『貼雑年譜』（貼雑帳）とは、わが国推理小説界の巨星・江戸川乱歩が、第二次大戦の最中、執筆の注文が途絶えたのを機に、それまでスクラップしていた新聞記事や手紙などを整理し、それに自筆で解説を施し、あるいは新たな図版を付け、丁寧に製本までして拵え上げた偉大な自分史の記録なのである。／大きさは、天地二十九・五センチ、左右四十三・三センチ、厚さは四センチ前後。本文用紙は薄茶色のハترون紙。ボール紙に母きくの帯を巻いて表紙にした、苦心の手製本である」と定義したうえで、こうしたスクラップを復刻することの難しさを語っている。また、台紙から添付資料を剥離する作業のなかで、「明らかに戦後のものが使われていたり、何度か貼り直されている箇所」、「何かを剥がした跡」などが見つかったと指摘し、『貼雑年譜』は「何らかの事情によって訂正が施されている」のではないかと推察している。

『貼雑年譜』には年代順の資料や記録とは別に、「出生ヨリ四十七才マデノ鳥瞰図」、「東京市ニ於ケル住居転々ノ図」、「文及反古類目録」などに関する貴重な情報が記されている。なかでも、「模造紙ノ袋ニ収メ

タル文反古 十一袋」は、(1) 大学時代、(2) 鳥羽造船所「日和」編輯時代、(3) 「自治新聞」編輯時代、(4) 団子坂三人書房時代、(5) 浅草オペラ後援会・少年雑誌、(6) 活動写真論文、(7) 「東京バック」、(8) レコード音楽会、(9) 職業指導論、(10) 社会局、工人倶楽部、大阪毎日新聞時代、(11) EXTRA ORDINARY (コレニハ探偵小説関係ノ文反古イロ／＼保存シテアル) 分類されている。今回のオンライン版では公開することができなかったが、これら「模造紙ノ袋ニ収メタル文反古 十一袋」については、今後、公開を進めていく必要がある。

また、作家として自立してからは、毎年「本年度ノ小説ト随筆」「座談会速記」「著書」「私ノ作ノ脚色発表サレタモノ」「受ケタル批評」「私ノ作ヲ収メタル他著」「提灯記事」「本年ノ主ナル出来事」などの記録(項目は年度によって異なる)がまとめられている。つまり、『貼雑年譜』はスクラップブックとしてだけでなく、自身に関する資料を照会するためのレファレンスとしても機能しているのである。

本解題が対象とする『貼雑年譜』は、第1巻(平井家関連資料および自身の誕生～1928年)、第2巻(1929年～1939年)、第3巻(1936年～1945年5月の戦時下資料)である。『貼雑年譜』の冒頭には「序」があり、乱歩の自筆で以下のように記されている。

時局のため文筆生活が殆んど不可能となったので暫く休養する事にした。その徒然にふとこの貼雑帖を拵へて置くことを思ひ立った。探偵小説を書き出して以来折にふれて切取って順序もなくスクラップ・ブックに貼りつけて置いた印刷物などを年代順に整理し、その他の古手紙、文反古の類などをあさって、ごく大略ながら私の過去を描いて見た。日記といふものを殆んどつけてみない私には、これが謂はゞ四十七年間の大ざっぱな日記である。印刷物と文反古による貼りませ自伝である。過去の思出に属するものはいろ／＼の随筆類にも書いてみるし、又探偵小説家としての回顧には「探偵小説十年」「探偵小説十五年」などの思出の話もあるが、それらとは別にかういふものも私には興味がある。この帖の印刷物の切抜きは一見甚だ丹念に集められてゐるやうであるが、決して完全な蒐集とは云へない。ある時期には大きなものを見逃したり保存を忘れてしまつてゐるからである。しかしさういふ缺点是ありながらも大きな出来事は大体これで分るのである。

これはむろん他人に見せるものでなく、主として私自身の備忘と慰みのためのものであるが、兼ねて又、私の家族、子孫にとっては、かういふものにも何等かの興味があるのではないかと考へてゐる。

昭和十六年四月初旬

平井太郎誌

ここで乱歩は『貼雑年譜』の内容を二種類に分けている。ひとつは手許に残っている「印刷物」、もうひとつは雑多な「文反古」である。また、ここで乱歩は「他人に見せるものでなく、主として私自身の備忘と慰みのために」編集したと書いているが、この点に関してはあくまでも作家的弁明と捉えるべきだろう。文字の筆跡、出典の詳細な記録、そして第三者にも誤解のないように理解してもらうための様々な解説記事があることを踏まえると、『貼雑年譜』は明らかに「自伝的作品、であり、他者の眼が入ることを意識して書かれていると考えるべきである。もちろん、第一の読者として想定されているのは自分自身であり家

族や子孫なのだろうが、作家・乱歩にとって読者を想定しない編集や記述を心がけることは、そもそも不可能だったということである。

『貼雑年譜』第1巻は、平井家に伝わる文書目録や筆蹟に始まり、幼少期の履歴が詳しく綴られる。ここで乱歩が拘泥しているのは住居移転図¹と父の職業移動である。彼は幼なかつた頃を住居の空間的移動と父の職業移動にともなう家庭環境の変化から呼び戻し、文字に定着させようとするのである。なかでも、1912年6月に父が経営していた平井商店が破産した際の状況については多くの分量が割かれ、「私の小学時代／私の中学時代／中学三年頃のノート的一片／中学三年生の頃の日記」などが転載されている。ここでの乱歩は、記憶を想起する主体として筆を執るのではなく、当時の自分を掘り起こすことに傾注しているといえる。だが、中学三年生になって雑誌をつくる愉しさに目覚めた頃から、その内容は大きく変わる。活字フェチとしての顔が前景にせり出すようになる。自分で企画を立て、記事を書き、雑誌を編集発行するという一連の作業に没頭する日々は、のちに作家として自立するようになってからも継続され、彼の生涯を貫く支柱となっていくのである。したがって、本解題の前半では乱歩における雑誌偏愛という観点から『貼雑年譜』の内容を紹介し、乱歩が自分自身をどのように把握し、どのように描いたかを考える。

2 雑誌をつくることへの目覚め

乱歩における雑誌偏愛を考えるうえで重要なのは、それが頭のなかにある幻影を形にする乗物であると同時に、恋愛対象のようなときめきを与えてくれる存在だったということである。彼は、無機質な金属の塊であるはずの活字が組み合わせられて紙のうえに印刷されていく過程そのものに生命の息吹を感じ、それを見届けられる場所に立ち続けたいと願う作家だったのである。

乱歩が初めて雑誌を手がけたのは『中央少年』である。『貼雑年譜』には「少年雑誌ノ発行」という見出しのもと、『中央少年』（第二巻第一号）の表紙と目次が添付されており、「中学三年頃自画自刷ノ少年雑誌（或ハ中学二年ノ頃カ）」という言葉が付されている。また、「冒険小説「怒涛」ト「悲しき思出」トヲ書イテキル 鉄筆文字ハ全冊私デアル。会則ニハ会費制度ニナツテキルガ実ハ小学校前ノ文具屋ナドニ委託販売ニシテ可ナリ売レタモノデアル。」という自己解説も記されている。

もうひとつ注目すべきは、彼が「非売品」と記されたこの雑誌を文具屋に「委託販売」していたことである。雑誌はただ自己満足で作ればよいというのではなく、読者に届けることではじめて意味をもつし、それは一定の対価によって得られるものでなければならないという信念があったからこそ、彼はそのような大胆な方法を取ったのであろう。実際にどれほどの部数が刷られ、どの程度出回ったものなのかは分からないが、敢えて「非売品」と記したうえでそれを販売するという戦略には、あまたの文学少年とは違う出版経営者的な資質を認めることができる。

当時の乱歩は愛知県立第五中学校の生徒だったわけだが、雑誌名に「中央」という言葉を入れ、表紙面に学帽を被って書物を読む学生を描いている点、それを樹木に擬え千羽鶴と組み合わせている点についても明確な意図を感じる。そこには立身出世あるいは「中央」への志向が如実に表現されている。この表紙

の雑誌を「小学校ノ前の文具屋」に並べれば確実に売れるはずだという算段があるからこそ、彼はこうした表紙画を採用したのであろう。

『貼雑年譜』には「笹舟」と題した号の目次と少年会なる組織の会則も添付されており、目次を見ると表紙の御題は「松上の鶴」、口画、巻頭冒険小説、画物語り、普通記事、悲哀小説、普通記事、怪談、読者の領分で構成されていたことがわかる。会則には「本会は少年の思想改進黨を目的」「本会には会長一名顧問数名。別及常務委員をおく」といった項目が並んでおり、中学生の遊びとは思えない本格的な体裁になっている。雑誌は「非売品」だが会費として「金参銭」を徴収することが定められ、発行所の住所、電話番号、「不許複製」の警告まで記されている。また、懸賞作文の募集も行われており賞品は「面白い御伽噺の書籍等を呈します」とある。

3 早稲田大学時代の乱歩

こうした偏執的な気質は早稲田大学入学後さらに増幅していく。1912年3月、愛知県立第五中学校を卒業した乱歩は第八高等学校を志望するが、父の破産により進学を諦め家族で朝鮮に渡る。だが、学業への希望を棄て切れなかった乱歩は苦学を覚悟で上京し、同年9月、早稲田大学政治経済科予科に中途編入する。叔父の口添えにより棲み込みとして働きはじめたのは下谷区湯島天神町の活版屋・雲山堂であった。活字との「密約」を交わした乱歩にとって、それはこのうえない働き口だったはずだが、実際には南京虫と過労に悩まされ、わずか三ヶ月で活版屋を離れることになる。その後は図書館の貸出係、英語の家庭教師などのアルバイトに忙殺される。『貼雑年譜』には「コノ頃、私ノ中学校以来ノ雑誌発行熱ハマダサメテキナカツタ。雲山堂活版所デモ主人ニ雑誌発行ヲ勸メテ容レラレナカツタヤウナコトモアルシ、下駄屋ノ二階時代ニモ絶エズソノコトヲ計画シテキタ」と記されている。

1913年9月、大学部政治経済学科に進級した乱歩は、翌年の春に級友数名とともに廻覧雑誌『白虹』を創刊して幻想小説「夢の神秘」、叙事詩「オルレアンの少女」などを書く。だが、同誌は原稿用紙の束を綴じただけの簡便な作りになっており、雑誌と呼べる代物ではなかった。「廻覧雑誌『白虹』ノコト」（『貼雑年譜』前出）と題した解説には、同誌のことが、「喜久井町ノ家ニキル間ノ思出トシテ、前記ノ少年新聞失敗ニツイデ、コノ肉筆雑誌ノ発行ガアル。級友数名ヲ誘ツテ原稿紙ヲ綴ヂタ厚イ雑誌ヲ出シタ。大正三年二月号カラ一年余リノ間ニ五冊ホド出シタカト思フガ、ソノ内三冊ガ私ノ所ニ残ツテキル。ソレニ寄稿シタ私ノ文章ハ別表ニ記シタ通りデアル。カクノ如ク私ハ何かシラ雑誌ノ編輯、発行トイフヤウナコトヲシナイデハ我慢ガ出来ナカツタノデアル」と記されているだけである。

本科生として経済学を学び始めた乱歩は、やがて本気で政治家をめざすようになる。それまでのような趣味人氣質の文学少年を脱し政治や経済に対する持論を力強く訴える青年へと変貌する。早稲田大学雄弁会が催した懸賞演説会に登壇して「二個師団増設反対演説」（1913年12月6日）という演題で「経済学カラ見タ非戦論」を展開したりもするようになる。こうして乱歩にとっての雑誌は、学費を稼ぐための道具でもなければ小説を発表するための媒体でもなく、自らの主義主張を訴えていく言論の場として認識され

るようになる。

こうして政治への道を志した乱歩は出資金 20 円を集めて『帝国少年新聞』を創刊し、喜久井町五番地にあった祖母の家に帝国少年新聞社の看板を掲げる。「帝国少年新聞 主意書」なる宣伝チラシ（『貼雑年譜』に添付）まで作成し、「現今の新聞紙の欠陥として数ふるものは多々あるべしと雖茲に吾人が謂はんと欲する処は其文章難解にして婦女年少者又は高等の智識を有せざる労働者等の読むに適さざる事なり」「本新聞は其内容の一半を時事問題の解釈及重大事件の報道に充て他の一半は趣味あり実益ある少年小説御伽噺又は科学的の談話等を満載し以て少年をして娯楽の内に日常の出来事を知らしめ知らず識らずの間に国家的感念を深からしめん事を計らんとす」と記している。

『帝国少年新聞』を全国展開しようと考えた乱歩は、「本社は主義を全国に広めたい為に種々其方法を考へた結果全国の雑誌に趣味を有する少年諸君に御相談して支部を作つて戴く事にした」と訴え、やや強引な組織拡大の働きかけをする。チラシには、新聞のコーナーとして、主張、通信、学術談話、少年小説「希望」、冒険小説「黄色黒手団」、滑稽小説「仙骨」、お伽噺「不死王国」、その他が紹介されており、「○普通新聞紙の半分大で四頁／○一頁六段四十行十六字詰総字数一万五千字余」の体裁、「毎月三回一日十一日廿一日発行」を予定していたことがわかる。もちろん、このような安直な企画がうまくいくはずはなく、のちに乱歩は『貼雑年譜』に「コレヲ少年雑誌ノ投書家ナドニ送ツテ読者ヲ得ヨウトイフ虫ノヨイ考ヘデアツタ。今カラ考ヘレバ滑稽ノ至リ、少々低能ノ気味スラ感ジラレルガ、二十オトイフ若サノ無分別デアラウ」と記すことになる。

『帝国少年新聞』で苦い経験をした乱歩は、大学生活の後半を図書館で過ごす。早稲田大学の図書館はもとより、当時、東京で洋書や翻訳物が最も充実していた上野図書館、日比谷図書館、そして大橋図書館に通い詰めてポー、ドイル、フリーマンなどの理智的な短篇探偵小説を耽読する。また、政治や経済に関する専門的な知識を蓄えるために知人を介して憲政会の院外団が出していた『自治新聞』の編輯を手伝う。のちに『貼雑年譜』のなかで「記事ハ勿論、カツトヤ表紙ナドノ絵モ私ガ書イタ。全頁二度刷リノ絵表紙ナドモアツタノダガ今紛失シテ、コレニ貼リツケルコトガ出来ナイノハ残念デアル。同誌ハ大正四年一月号（第四号）デ資金難ノタメ廃刊ニナツタ」と回顧されているように、当時の乱歩はこの新聞の編輯に相当の力を注いでいたようである。なお、乱歩は同紙の終刊号となる第四号にさゝふねの筆名で、かつて『白虹』に発表した長詩「オルレアンの少女」を再掲載している。

大学三年生になった乱歩はダーウィンの『進化論』²と出遭い、クロボトキン『相互扶助論』、マルサス『人口論』などを次々と読破していく。『貼雑年譜』に「私ノ時代ハマルクスノ流行ヨリハ少シ早カッタノデ、最モ影響ヲ受ケタ本ハ何カト云ヘバ結局ダーウキンデアツタ。ツマリ育チトシテ自由主義者デアツタワケデアル」と記すほどダーウィンの学説に傾倒し、のちに「競争論」³というテーマで卒業論文を執筆することになる。

この頃の乱歩は、自分が読んだ探偵小説に関するメモなどを整理して『奇譚』という手製の書籍を造本している。『貼雑年譜』に記載されている「文反古類目録抄」⁴を見ると、ドイルの「試験騒ぎ」翻訳も手製本に収録と記されている。いずれにしても、当時の乱歩にとって自分だけの書籍を拵えるということがひとつの愉しみになっていたことは確かであろう。『貼雑年譜』には、『奇譚』のことが、「私ハ「奇譚」ト

題スル探偵小説読書目録ノヤウナ本ヲ手製デ装幀シテ、今モ持ツテキル。探偵小説ハ涙香物ナド子供ノ時カラ読ンデキタガ、ポー、ドイルナドヲ知ツタノハ大学ヘ入ツテカラデ、大学部二年生ノ頃カラ外国探偵小説ヲ愛読シタ、ソシテ翻訳モ試ミタシ創作モヤツタ。一方暗号史トイフヤウナモノニモ興味ヲ持チ上野図書館デ調べタコトガアル」と記されている。

現実逃避のようなかたちで海外探偵小説の世界にのめりこんでいった乱歩は、やがてアメリカに渡って英語で探偵小説を書くという夢を抱くようになる一方、安定した収入を手に入れるため会社員になるしかないという現実にも直面する。1916年の日記に探偵小説「火縄銃」の下書きを書きつけたり、冒険探偵小説「悪魔ヶ岩」の草稿を書くが、結局、誰かに読んでもらうほどの自信作にはならず悶々とした日々を過ごすことになる。のちに乱歩は、『貼雑年譜』の備忘録で自らの学生時代を振り返り、「私ハ大学時代文学トイフモノヲ全ク知ラナカツタ。雑誌好キノクセニ文学ヲ知ラナイナンテ変デアルガ、ソレガ事実デアル。現代純文学ヲ了解シタノハ大学ヲ出テ一年ホド後デアツタ」と記しているが、それは当時の乱歩にとって偽りのない実感だったと思われる。

4 職業流転の時代

早稲田大学を卒業した乱歩は、代議士・川崎克の紹介で、同じく代議士だった加藤定吉が経営する加藤洋行の大阪支店に就職する。命じられてもいないのに店の庭の掃除をしたりして支配人に可愛がられた乱歩は、毎晩同僚たちと盛り場に繰り出すようになる。当時の加藤洋行は大連、上海、漢口といった外地にも支店をもちデパート経営から雑貨の卸小売りまで手広い商売をしていたため仕事は順調で収入も多かったようである。また、直接的な言及はなされていないが、こうした経緯からみて大学卒業後の乱歩がまだまだ政治とのつながりを期待していたことは想像に難くない。

年の暮れに思いがけない金額のボーナスを貰ったことで放蕩を覚えた乱歩は、次第に仕事に身が入らなくなっていく。『貼雑年譜』にはその頃のことを「放蕩トイツテモ大シタコトガ出来タワケデハナカツタガ、ソレヲツバケテキル内ニ段段店ニ居ヅラクナツタ、店ノ金ヲ使ヒコムトイフホドデハナクテモ、何トナク不義理ガフエ、大正六年五月頃、遂ニ私ハ店ヲ出奔シテシマツタ」と記されている。

放浪の旅に出た乱歩は伊豆箱根の温泉宿で再び文学への情熱を取り戻していく。「コノ放浪中ノ温泉宿ノ徒然ニ、私ハ初メテ谷崎潤一郎ノ小説ヲ読ンダ。ソレガ現代小説トイフモノニ接シ、ソノ意味ヲ了鮮シタ最初デアツタ。好ンデ綜合雑誌ナドノ小説ヲ読ミダシタノハ、ソレカラ以後ノコトデアル。文学トイフモノニツイテ如何ニオクテデアツタカラ知ルベシ」（『貼雑年譜』より）。それがこの頃の認識である。

東京に舞い戻ったあとは活動写真会社を尋ねて弁士を志願してみたり、上野図書館で外国映画に関する書物を読み漁ったりする日々を過ごしている。そこで得た知識をもとに映画論のようなものを書き始める。もちろん、それが収入につながるわけではないため身の回りのものを売りながら露命をつなぐしかなかったようだが、文学や映画に耽溺する日々を送ることで乱歩は再び書きたいという衝動を募らせることになる。なにもかもがうまくいかない時期だからこそ幻影の世界が輝きはじめる。

当時、小工場を経営していた父によって大阪へと連れ戻された乱歩は、ここでなぜかタイプライター販売員になっている。文字盤を打鍵することで活字を紙に打ち付け、文字を印字するタイプライターは、まさに乱歩の嗜好にピッタリの器械だったと思われるが、残念ながら営業の仕事は向いていなかったらしく、ごく短い期間しか続かなかった。ただし、『貼雑年譜』を読むと、この頃の乱歩がのちに「火星の運河」というタイトルで『新青年』に発表される小説の原型を書いていたことがわかる。

その乱歩に再び雑誌編輯の機会が訪れるのは1918年のことである。前年の11月に父の知人を介して鈴木商店鳥羽造船所社員となっていた乱歩は「鳥羽おとぎ倶楽部」なる会を組織し、地域の劇場や小学校でお伽噺を聴かせる活動を始める。また、1918年には懇意にしていた伊勢新聞社活版部に印刷を依頼して雑誌『日和』^{にちわ}を創刊し、発行兼編輯人として健筆を奮うことになる。『貼雑年譜』には乱歩自身のカットに続き「首途」という「編輯者発刊の辞」が添付されており、「若き吾人は、若き造船所に働きつい、鳥羽の一角から世界の一大進轉を見詰めて居る。この雑誌がかかる記念すべき時期に生れたるは、偶然乍ら幸先よき極みではあるまいか。／社会百般の害悪は殆ど凡て人間の頭の悪さより起る。戦争の勝利を国家永遠の利益なりと信ずるもこれ。随つて軍隊の為に莫大の費用を費すもこれ。監獄の常に満員なるもこれ。而して、資本家と労働者の紛争の如きはその最もよき一例である。テイラーは物質的の無駄を省くことを高唱した。我等は誤解と云ふ精神的の無駄を省くことに、より一層努力せねばならぬ。／誤解の弊を避くるには頭をよくせねばならぬことは勿論、更らに、各自の意志を思ふさま発表し合ふことが緊要である。本誌はかかる方面に於て人類平和の一助を為す。／もの云はぬは腹ふくるゝ業である。物質的自由の極限さるゝ吾人は、精神的自由を求めて止まぬ。止むに止まれぬ思想の発表を押へて、常に腹ふくるゝ人は何時かは、腹中のもの腐敗し去るか、力余つて腹を破るかの一に到るべき運命を免れぬ。即ち、思想の発表は、人間に於ける安全弁である。本誌はかかる安全弁の役を務むる」と記されている。

雑誌『日和』に関して、『貼雑年譜』には「『日和』がドウイフ雑誌デアツタカハ、左ノ一文で想像ガツクト思、コレモ技師長榎本氏が大変熱心デ、私ハ会社ノ仕事ヲシナイデモヨイヤウナコトニナツテキタ」と記されている。乱歩が「『日和』歌壇」に投稿した「ふと見れば蝶の翅一つ風に舞ふ、ある冬の日の淡き悲しみ」という短歌や「道楽くらべ（その一）歌道楽」という漫画まで掲載されており、乱歩がひとりで全体を切り盛りしていた様子が伝わってくる。また、『日和』第二号（1918年12月15日）の巻頭にはスペンサーの社会進化論に基づく近代文明論「塵雑より統一へ」を発表し、「凡そ物の統一には必ず明瞭なる中心を要する。一貫せる主義を要する。人心の統一も勿論例外ではない。真の生産に生きんとするものは主義なく中心なき無機的混合を排して、生命ある有機的結合を求めねばならぬ。我等はいやが上にも主義と中心との明瞭ならんことを要求して止まぬ」と主張している。

乱歩はこの二号をもって鳥羽造船所に辞表を提出し編輯から離れることになる⁵。彼はここでも生活が落ち着くとそれを放棄して刺戟的な環境を求めてしまう悪癖を発揮してしまうのである。『貼雑年譜』には「学問ノ夢（鳥羽造船所退社に關聯シテ）」という文章があり、「心ニモナイ職業ニツイテキルト（職業トイフモノハ常ニ私ニトツテハ心ニモナイノdeal）「一体何ノタメニ生キテキルノカ」トイフ疑問ニ堪ヘラレナクナツテ来ルノdeal。人生トイフモノヲ、心底ニマデツキツメテ考ヘナイデハキラレナクナルノdeal、ソ方法トシテ私ニハ文学ヲ通ジテノ勉強シカナカツタ。即チ学問ノ夢deal。ソレハ幾度試ミテモ体力、

資力共ニ乏シクテ、一度モ夢ヲ果タシタコトハナイノデアルガ、ソレユエニ、夢ハイツマデモ、四十八才ノ今日マデモ、夢トシテ残ツテキルワケデアル」と記されている。ここにはのちの乱歩が顔を覗かせている。若き日の退社理由を書いているうちに、いま48歳になった自分が顔を覗かせ、忸怩たる思いに至っている乱歩がいる。

1919年2月、上京した乱歩は本郷区駒込林町六番地（団子坂上）に古本屋を開業する。二人の弟と一緒に開業した書店ということで名前は三人書房とする。芸術関連の書籍を並べ、日本歌劇研究会田谷力三後援団（5月）を立ち上げるとともに、レコード音楽会（8月、9月）を開催する。資金難により実現はしなかったものの歌劇雑誌の創刊も企てている。ここで乱歩がめざしたのは、ただの古本屋ではなく芸術や文化活動を担う人々の交流を促すサロンのような場だったのであろう。

そうしたなか、乱歩のもとに雑誌の編集を任せたいという依頼が舞い込む。漫画会同人の後援で漫画雑誌『東京パック』⁶を出していた北澤楽天から版權を譲り受け、誌面の刷新を考えていた下田憲一郎が、たまたま知り合いだった乱歩に声をかけてきたのである。『貼雑年譜』にはそのことが「当時ノ漫画界ノ大家達ヲ訪問シテ原稿ヲ貰フコトハ、編輯ヲスルノガ仕事デアツタガ、私ハ大家ノ絵ノ中ヘ自分ノ漫画モ入レ、又雑文ソノ他文章ノ部分ハ一手ニ引受ケテ自分カラ書イタ」と記されている。

この頃の『貼雑年譜』を読むと「私ハマルクスニ興味ヲ持チハジメ、ソノ付記ヲヨンデキタ」という一節に気づかされる。また、「時局パックリ」に「普通選挙が官僚によつて称へらるゝ御代となれる。移れば変わる世の習か。その昔普通運動の下回りを務め寺内内閣によりて検束せられし、羽織ゴロ共近頃その官僚の使唆によりて普通選挙を唱へ始め居れり。官僚が内閣乗つ取りの下心。こゝにも、物欲し相な政權餓饑共の惨状を見る。イヤハヤと申すべきか」という挑発的な記事を書いたことで特高警察から目をつけられたこともあったようである。『貼雑年譜』にはそのときのことが「要視察人トイフ程デハナイガ、サウイフ目ニアツタノハ生レテハジメテデアツタノデ、私ハ刑事ニ気焔ヲ上ゲナガラ、イサハカ得意ヲ感ジタノデアル」と記されているが、マルクスへの傾倒といい政治家を挑発するような文章といい、この頃の乱歩には同時代の政治体制に対する明確な批判意識があったようである。

生活が安定すると環境を変えたくなり、雑誌の仕事に就くと独善的な編集をして周囲に迷惑をかけるという失敗を繰り返していた乱歩は、いよいよ苦境に追い込まれる。1919年11月には鳥羽造船所時代に知り合った村山隆子と結婚しているし、それと前後して朝鮮から引き揚げてきた母と妹が三人書房の二階に同居するという状況が生じている。翌年2月には長男・隆太郎も誕生している。だが、肝心の生活は一向に目途が立たず、支那蕎麦の屋台を借りて商売をすることを思い立ったりしている。翌年の2月からは東京市社会局の吏員に採用され月給生活となるため、実際に屋台を引いたのはわずか10日ほどらしいが、商売としては儲けが多かったらしい。

さらに、この頃の乱歩は同居人の井上勝喜⁷とともに智的小説刊行会なるものを組織し、『グロテスク』という雑誌の発刊を企てている。「智的小説刊行会規約」と題されたチラシには、「(1) 事業 / (A) 月刊雑誌『グロテスク』の発行。 / 毎号四六版百五十頁乃至二百頁。謄写版。 / (B) 会員の会合。雑誌上にて相談の上、時機を見て会合、晚餐会乃至茶話会を催して意見の交換をしたり、種々の智的遊戯を試みたりする。(例へば、探偵ゴツコ、探偵劇の催し等) / (C) 会員の作品中優秀なるものを、相当機関に(この

あとの文面不詳)」とあり、中学生の頃『中央少年』で夢見ていたことを大人になって再びやろうとしていたことがわかる。ちなみに、この『グロテスク』に関しては、82頁にも及ぶ見本雑誌を作成して主意書とともに各方面に送ったり、『読売新聞』の三行広告欄で会員を募ったりしたという。『貼雑年譜』には「智的小説刊行会設立の理由」なるガリ版文書が添付されており、

我等は好奇の小説就中探偵小説を極愛するものの一団です。世間では探偵小説其他好奇的な小説をセンセイショナルと称して、一概に下品な劣等なものにして了つて居る様ですが、我々は左様な見解を持つてゐる人々こそ低能な生半可だと思ひます。／純文学が人情の機微を写し出すものであれば、探偵小説などは智識の機微を写し出すものです。一は人情の感じて未だ云ひ得ざる所を深く細く云ひ現はす所に妙があると同一様に、一は人智の想像し得る限りにして未だ常人の思ひ及ばざることの作品をご批判下さつたりして、我々の拳を助けていただきたいと思ひます。

と記されている。この文書に乱歩の率直な思いが書かれていることは間違いないが、「低能な生半可」などといった表現で読者を見下す姿勢をみても、当時の彼がいかにバランス感覚を逸していたかがわかる。

1920年10月、乱歩は父の斡旋で大阪時事新報記者の仕事に就く。三人書房を舞台とした東京での慌ただしい生活は終わりを告げ、一家は大阪で父の家に同居することになる。このとき与えられたのは『時事新報』の地方版編輯であり、こうした作業に慣れた乱歩にとってはかなり楽な仕事だったようである。『貼雑年譜』にはその内容が「集マツテ来ル記事ノ軽重ヲ考へ見出シヲツケテ、一頁分ノ大組ヲスレバヨイノデ、午前十時頃に出勤午後四時ニハ帰宅スルコトガ出来タ」と記されている。家族と一緒に暮らせるだけの安定した収入が得られ時間的な余裕もできたのだから、常人であれば本来の夢であった作家としての自立に向けて創作活動に勤しむところだろうが、自分の力で好きなように雑誌を編輯したいという熱病に憑りつかれた乱歩は、またしても東京からの誘い水に導かれて上京してしまう。

1921年4月、乱歩は庄司雅行の斡旋で日本工人倶楽部書記長となり一家で上京する。大阪時事新報の月給60円が100円の月給になるという条件面での魅力もあったのだろうが、それと同時に大きかったのは地方版の記事を機械的に処理するだけの記者業務に退屈していたということかもしれない。この年の夏に乱歩が印刷した「暑中御見舞」（『貼雑年譜』に添付）には「二十八歳の夏を迎へ候、おれは偉いと思つたり、おれは馬鹿だと思つたり、一生の大事業を計画して見たり、三十になるやならずで死ぬかもしれぬ身をはかなんだりして幾年月を過ご候へ共、生れつきの性向から仕事に於ては割合に分相応の方向に相向ひ居候／暑中見舞を種に、平井太郎の存在を忘れまじとこの端書差出し申候」という意味深長な文言が記されているが、こうしたもの言ひの背後に苦悶と矜持の混濁を見ることはそれほど難しくない。

日本工人倶楽部書記長となった乱歩は工人倶楽部機関誌『工人』の編輯を中心に献身的な仕事ぶりをみせる。従来と同様、自身の署名記事として翻訳「科学的適材適所主義」（1921年5月）、「質問応答」（同年7月）、翻訳「トレード・ユニオンの職分」（同年11月）、論説「競争進化論」（1922年1月・未完）を掲載する。1921年8月には『工人』特別号「労働争議記録」を編輯し「最近労働争議記録号」総論を書く。乱歩の提案により表紙を差し替えて別冊として売り出された日本工人倶楽部編『最近労働争議記録』（日本

工人倶楽部、1921年9月)は書店でも高い売れ行きを示す。特別号の巻頭に乱歩が書いた「労働争議号序」には、「七月は労働争議の月であつた。阪神を中心として全国に幾十の争議は頻発し、遂に軍隊の出勤を見て尚ほ解決に至らぬ状態である。大正十年七月は日本労働運動史に一時代を画した。我々は工人の立場より冷静なる批判を下し、最良の態度を決定せねばならぬ。その批判の材料として本誌八月号の全頁を提供することにした。材料なるが故に凡て客観的記述である。出来る丈記者の主観は避けられた。／先づ一般論として争議に対する政府、資本家、棒給生活者の態度の一端を示し、今回の争議の根本原因たる失業の状態を述べ、争議に関する新記録を略記して各論に入り、川崎、三菱の争議顛末より小は人力車輓子の同盟運動に至るまで、地域に於ても北海道より台湾、上海に及ぶ三十有余の争議の大体を記述した」とあり特別号に対する乱歩の意気込みが伝わってくる。

また、この誌面を添付した『貼雑年譜』には、

大正十年ハ労働争議ノ年デアツタ。コレニ対シ技师ノ組合デアル工人倶楽部モ何ラカノ意志表示ヲシナケレバナラナカツタ。ソノ資料トシテ全労働争議ノ鳥瞰図ノ如キモノヲ作ル意味で、私ハ右ノ特別号ヲ編纂シタ。ソシテ巻頭ノ総論トイフヤウナモノヲ執筆シタノデアルガ、ソノ全文ハ前記ノ通り別ノ袋ニ収メテアル。コヽニハ序文ダケ掲ゲタ。コノ特別号ハ一般に売出シテモ需要ガアリサウニ思ツタノデ次頁ノヤウナ表紙ヲツケテ別ニ数千部印刷シ、書店ノ店頭ニ出シタトコロ、可ナリノ売行ヲ見タノデアル。

とあり、「労働争議ノ鳥瞰図」を示すという方法意識を明確にしている。ここでの乱歩にかつてのような性急さ傲慢さはなく、あくまでも客観的な立場から争議の状況を記述しようとする姿勢が貫かれている。

仕事ぶりを評価した庄司雅行は、自らが始めた郊北化学研究所の支配人として乱歩を招聘し月給150円という好待遇を与える。こうして工人倶楽部書記長を退いた乱歩は雑誌『工人』の編集と印刷のみを請負う契約をする。仕事が順調に回り始めた乱歩は書生を同居させて大学に通わせることができるほどになる。だが、庄司雅行に資金力がなかったため、乱歩はわずか四カ月で支配人の仕事を解任され、『工人』編集についても自ら月給半減を申し出ることになる。一度は、妻子を大阪の父宅に預けて単身東京に残るという決意をするが、結局、妻が大病を患ったのを機に大阪の親許に連れ戻されてしまう。すでに三十代を目前に控えていた乱歩にとって、それは屈辱的な日々だったに違いない。

それまでの乱歩だったら、ここでまたすぐに新しい仕事に就いて捲土重来を図ったことだろうが、ここでの乱歩はそうした安易な動きをせず、1922年7月から12月までの半年間を失職状態で過ごす。そして遂に探偵小説作家としてデビューを果たすべく「二銭銅貨」と「一枚の切符」を書き上げる。ちょうどその頃、神戸市図書館において倒叙小説に関する講演⁸をした馬場孤蝶に共鳴した乱歩は、原稿を孤蝶に送るが、多忙だったため目を通してもらうことすら叶わず、取り戻した原稿を博文館『新青年』の主幹・森下雨村のもとに送る。すると「二銭銅貨」を拝見して、すっかり感心させられました。「一枚の切符」も同様、一気に拝見して、大変いい作だと思ひました。正直なところ、新年号へ載せた二三の作などより遙にいいものだと存じます」という賞讃の書簡(1922年12月2日付)が届き『新青年』掲載が決まる。乱歩は、まさ

に妻の大病のおかげで机に向かって探偵小説を書く時間を手に入れ、極限まで追い込まれた状況のなかで作家になるための跳躍を果たすことができたのである。『貼雑年譜』には、このときの書簡がそのまま貼り付けられており、乱歩にとってそれがどれほどありがたかったかが伝わってくる。

以後の乱歩は、大橋鉄吉弁護士事務所の手伝い、大阪毎日新聞広告部員などの仕事をこなしながら森下雨村の期待に応えるための原稿執筆に勤しむようになる。「一枚の切符」（『新青年』1923年7月）「恐ろしき錯誤」（『新青年』1923年12月）を発表し、新人作家としての足場を固めていく。仕事においても、新聞社の広告部員だった時期に編輯者として蓄積してきたアイデアを駆使して周囲を唸らせるなど、すべてが好転しはじめる。『貼雑年譜』にはその頃のことを「セメント会社ノ一頁聯合広告ヤ「紙上機械展覧会」ト銘ウツタニ頁聯合広告ナドハ前例ノナイ意匠デ、社長ノ注意ヲ惹イタホドデアツタ。ソレラノ広告頁ノ保存シテナイノハ残念デアル。又アル時ハタ刊一面下ノ三段ニ漫画広告トイフモノヲ初メ、私自身ツバキモノ、漫画ヲ書イテ、ソノ一駒々々ニ各商店ノ広告ヲ入レテイク方法ヲ発案シタコトモアル。ソレモ残ツテキナイノデアル。」と記されている。

だが、ここで乱歩はもうひとつの奇跡に恵まれる。それは1922年9月1日に起こった関東大震災を直接体験せずに済んだことである。もし彼がそのとき東京に留まり、安普請の借家に棲んでいたら、どれほど大変なことになっていたかは想像に難くない。乱歩はまさに妻の大病があったことで大阪に居を移し、その選択によって命拾いをしたのである。

5 作家・江戸川乱歩の誕生

大手出版社の商業誌に小説を掲載できた作家は、多くの場合、同人誌や格下の商業誌への寄稿を躊躇うようになる。原稿料をもらって作品を掲載することが作家の本分である以上、原稿料の安い雑誌に寄稿することは自作の商品価値を下げることにつながるからである。だが、乱歩は『新青年』でデビューしたあとも自前の雑誌を作り続けることを止めなかった。乱歩が春日野緑とともに立ち上げた「探偵趣味の会」はそうした実践のひとつである。

1925年1月、乱歩は初めて名古屋の小酒井不木と対面するとともに、上京して博文館の森下雨村や自身の作品を絶賛する書簡を送ってくれた宇野浩二のもとを訪ねる。また、こうした行動を通して多くの探偵小説作家たちと出遭い交流を深めていく。「伊藤恭雄、井上爾郎、本田緒生、和氣律次郎、横溝正史、山下利三郎、顯考與一、小酒井不木、水谷準、井上豊市郎、西田政治、大野木繁太郎、春日野緑、村島歸之、松本五郎、甲賀三郎、江戸川亂歩（名簿上の表記一筆者注）、平野嶺夫」を発起人とする「探偵趣味の会」は、こうした交流が実を結ぶかたちで1925年4月に発足する。

その活動内容をみると乱歩が中学生の頃から繰り返してきたことがそのまま実現されていることが分かる。たとえば、乱歩が書いた「発刊の言葉 探偵趣味の会の設立」（『新青年』1925年6月）には、「探偵小説を愛好する人々を始めいはゆる探偵味のある仕事に携はる人々——例へば法医学者、化学者とか、警察や法曹界の人々、民間探偵など——同じ趣味の人々が集まつて、お互いの研究を発表しあふことは非常に

面白く且つ有益だと思ひます。この会は去四月創立以来既に本邦探偵小説作家翻訳家の殆んど全部を会員に網羅し既に四回の会合を開いてみます。本会の事業は（一）犯罪及探偵に関する科学的研究（二）探偵小説の創作と翻訳と批評（三）探偵趣味講演会開催（四）探偵的活動写真の鑑賞（五）犯罪及探偵に関する各種施設の見学（六）会員の探偵作品などを各雑誌へ推薦紹介する（七）機関雑誌の発行等で、同行者はだれでも歓迎します。会費月五十銭（なるべく半年分三円前納を望む）会員には週刊『サンデーニュース』を機関とする本誌を贈ります」とあり、多種多様な職業の人々が集って探偵小説に関連する諸事業を包括的に行っていかうとしていたことが分かる。

雑誌『探偵趣味』の編輯発行、会員の創作支援などはもちろんだが、会合の目的は単なる交流や親睦ではなく「研究」と「批評」に置かれている。つまり、乱歩が探偵趣味の会に期待したのは、新たな作家を養成して優れた作品を書かせると同時に、探偵小説を世に広めたいと考える出版社や愛好する読者を育て、優れた文芸ジャンルとしての可能性を追求することだったのである。

「探偵趣味の会」が創刊した『探偵趣味』は編輯者が毎号交代するという変則的なスタイルを取っており、創刊号は乱歩が担当している。後記「編輯当番より」には、「どうも探偵物は益々盛んになる様だ。今月の「婦人公論」は文壇知名の士に探偵物をかゝせてある。「新青年」の来る新年号にはやつぱり文壇人の探偵物を集める相だ。誰かゞ希望してみた廣津和郎氏も書いた相だ。新聞の文芸欄にも大部探偵小説のことが散見する。「読売」紙上の国枝史郎氏の「日本探偵小説界寸評」など、なかゞ盛んなものだった。その後も「読売」では一記者といふ人の涙香時代の回顧、「蠅の肢」の作者の紹介など、色々と書く。／さて、少し私事に亘るが、余白を借りて一言御挨拶を申述べる。最近左の方々の御論は、夫々有難く拝誦しました。／平林初之輔「新青年」の「心理試験」を読む、春日能為氏同上の「乱歩の創作集」、^{マツ}「井汲清次氏「都新聞」の「探偵小説の狭き門」／それから、国枝史郎氏に、「読売」の愚論に対するお答へ拝見しました。いづれお会いする機会もあることと存じます。万事はその節。（乱歩）」とあり、多くの雑誌・新聞が探偵小説を取り上げるようになってきていること、既成作家のなかにもそれに挑戦する書き手たちが増えていることが興奮気味に語られている。

当時の乱歩は職業作家となって一年余りということで、様々な雑誌からの執筆依頼に片端から応じていたと思われる。1925年度に発表された小説は実に16編を数えている。それまでに蓄積していた構想やアイデアが用いられているとはいえ、「D坂の殺人事件」「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」などの代表作が同じ年に発表されているというのは尋常なことではない。逆にいえば、当時の乱歩は自作の執筆に膨大な時間と労力を費やさなければならない状況にあった。にもかかわらず、彼はわざわざ面倒な思いをして探偵趣味の会の活動に奔走した。まるで新しい雑誌を作ることが創作の原動力であるかのように、忙しくなればなるほど『探偵趣味』の編輯にのめり込んでいったのである。

乱歩の雑誌偏愛はそれだけに留まらなかった。『探偵趣味』を通じて同好の士を集めた乱歩は、捕物帳や時代小説の領域で活躍していた既成の大衆文学作家たちとも連合して「二十一日会」を結成し、雑誌『大衆文藝』の創刊に携わる。『貼雑年譜』に添付された『「大衆文藝」創刊に際して』（1925年10月配布）には、「我々同好者の懇親と研究の会合であった『二十一日会』及びそれと文信歓談の間柄であつた人達との間に、計らずも機運が熟し、茲に月刊雑誌『大衆文藝』を創刊する事となりました。／『大衆文藝』は仮に

執筆同人を設けますが、決して我執党派の意義は無く、大きく外に向つて我々の信念を完成したいと思ひます。されば純理芸術壇と相俟つて車の両輪の如く、我々の目賭する大衆文藝を達成せしめたいといふのが真意であります」とあり、いわゆる純文学系の作家たちが集う既成の文壇に対抗して大衆文学の勃興を図り、「車の両輪」として機能させていこうとしていたことが分かる。創刊時の同人には「長谷川伸、本山荻舟、平山蘆江、白井喬二、矢田挿雲、土師清二、國枝史郎、小酒井不木、直木三十三、江戸川亂歩（名簿上の表記一筆者注）、正木不如丘、池内祥三」などがおり、乱歩の存在はむしろ異端に見えるが、乱歩のなかでは探偵小説と捕物小説が広い意味での大衆小説として機能していくことで既成の文壇に対抗できるという算段があったのであろう。

『探偵趣味』とは違い編輯の中心的な役割を果たしたわけではないため、どちらかといえば探偵小説作家が『大衆文藝』の一翼に加わって純文学の文壇に対抗するという意味合いが強かったと思われるが、こうした雑誌に加わることで探偵小説の可能性を語り合う仲間を得て創作の孤独から逃れることができたのは事実であろう。『探偵趣味』と『大衆文藝』それぞれに名を連ねた乱歩が盟友である横溝正史とともに上京したのが翌11月であることを考えると、それらの雑誌は東京における自身の立場や理念を明確にしておくための布石でもあったはずである。

ここまで、中学の同人雑誌時代から職業作家として再上京するまでの期間を射程に、『貼雑年譜』の添付資料や備忘録を通して乱歩が編輯したり同人として関わったりした雑誌を追ってきた。乱歩の前半生が常に新たな雑誌企画とともにあり、探偵小説の可能性を信じる多くの同士の囲まれていたことが分かった。大学時代には政治や経済に傾倒し、労働争議などを巡って先鋭的な議論を展開することもあったし、その後、記者として現場の取材に関わった経験もあるが、特定のイデオロギーや主義主張に基づいて行動するのではなく、自由で開かれた言論と創作の場を提供することが目的とされていたことも明らかになった。また、乱歩は記録魔であると同時に編輯魔でもあり、雑誌本体の装幀やデザインはもちろん誌面の隅々に至るまで趣味趣向を行き渡らせ、まさに自身の幻影をかたちにするに拘泥した作家だったということも確認できた。乱歩の小説には自分の趣味趣向に耽溺して破滅していく主人公が少なからずいるが、彼にとっての雑誌はまさに自分のやりたいことをそのまま形にすることができる智的遊戯の場だった。

だが、それと同時に重要なのは、結果として雑誌を編輯する技術と能力が彼の生活を支え続けたということである。大学卒業後、東京と大阪を行き来しながら数々の職業を転々とした乱歩が破綻せずどうにか暮らしていったのは常に彼に仕事を斡旋してくれる知己がいたからであり、その編輯能力に対する信頼があったからである。若き日に活字との密約を交わした乱歩は、活字を通して他者と関わり、活字を通して世界をまなざすことで生計を立て、やがて職業作家となることができた稀有な存在だといえるだろう。

6 疲弊と低迷

第2巻（1929年～1939年）になると、新聞、雑誌その他、紙媒体での切り抜き記事が多くなる。自分自身が書いた記事や参加した企画の記録はもちろんだが、自作に対する批評なども収録され、マニアとして

の本領発揮といった気配を見せはじめる。こうした記事に関しては、それぞれ自分に関連する箇所に赤鉛筆で傍線を引いたり囲みをしたりしており、乱歩が世間の評価に対してどれほど敏感になっていたかがわかる。また、この頃の乱歩にとって、主な関心事のひとつは文壇における探偵小説の扱い、文壇における自身の位置づけであった。したがって、第2巻には広告関連記事が非常に多くなる。

なかでも、乱歩が強く拘泥したのは全集や新刊書の広告である。たとえば、1931年6月に第1巻の配本が始まる『江戸川乱歩全集』（平凡社）の内容見本が届いたときのこと。全国の書籍小売店に送る宣伝印刷物には、「飛行機のパラシュートから乱歩人形が全国至るところを飛ぶ」という企画が書かれていたが、乱歩はわざわざ赤字で「コレハ困ルノデヤメタ」とコメントを書き込むなど細かいチェックを入れている。乱歩は自身の作品はもちろんだが、「江戸川乱歩」というキャラクターがどのような文脈で用いられるのかということにも意識的だったということである。内容見本に限らず『貼雑年譜』には数多くの宣伝広告文が貼付されており、その殆どはゲラである。逆にいえば、それらは『貼雑年譜』以外には流通していないものである。実際に流通したもの、新聞広告などになったものと比較検討することで、乱歩が修正を求めた箇所も具体的に把握できるはずである。

当時は、乱歩作品の翻訳、映像化、舞台化などが始まった頃でもある。たとえば、1936年には市川小太夫の一座によって舞台化された「黒手組」が全国各地を巡回して人気を博すが、乱歩は新聞や雑誌の劇評はもちろん各劇場の大入袋まで貼り付け、自分の作品が多くの観客を魅了していることを実感しようとしている。『探偵趣味』（1931年4月）に掲載された脚本（脚色・小納戸容）を集め、どのような演出が施されているかを確かめている。

もうひとつ、第2巻には、渡邊温、コナン・ドイル、小酒井不木などの追悼記事が広く集められている。古今東西を問わず、探偵小説というジャンルの生成発展に寄与した作家たちへの愛着を忘れず、その功績を記録に留めようとしている。ここでの乱歩は、同時期に逝去した作家たちに関連する言説を集め、それに続こうとすることで自らを鼓舞しているようにも見える。なかでも、コナン・ドイルに関しては、1930年7月15日にJOAKのラジオ放送で行った追悼の講演草稿がそのまま『貼雑年譜』に添付されており、最後の言葉は「ホームズは永遠に生きてゐる」と結ばれている。

そうしたなか、小説のアイデアを求めた乱歩は、書きたいテーマに関する積極的な取材活動を行うことで打開を図ろうとする。「吸血鬼の乱歩氏／突如軍港に現る 日本一の人形戯作者と会見 謎はどう展開するか」という見出しを掲げた『報知新聞』神奈川版（1930年10月14日）の記事を読むと、

人形の首をスツポリかぶつたチンドン屋と茂少年の迷？奇？怪？本紙夕刊連載の名作『吸血鬼』はいよいよ佳境に入る。作者乱歩氏は十二日午後一時突然横須賀駅着で本社支局を訪ね、昭和日本に残る唯一人の人形戯作者横須賀市逸見町の奇人井上勘平（六七）氏に面会を求め、直ちに支局員の案内で勘平老と屋根裏の人形部室に対談数刻に及んで引上げたが『吸血鬼』に全生命を打ち込んでゐる乱歩氏は——かくして一人形作りの実在人物よりヒントを得て作中に如何なるシーンを展開されるであらうか、一字一筆を運ぶ前の同氏の熱心な研究心こそ必ずや読者諸賢を思ふ存分魅了せずにはおかぬものがあらう、一介の人形戯作者の心境を表現するに当つてもかく熱心な作者の努力の跡こそ期して待

つべきである

とあり、乱歩が「人形戯作者の心境を表現する」ためのヒントを得るために、わざわざ横須賀まで出かけていたことがわかる。こうした取材活動はそれ以前には見られなかったことであり、欧米の探偵小説を耽読し、文献から得られた知識やアイデアをもとに斬新な作品を次々に生み出してきた彼が、方法的転換を図っていたことは明らかであろう。

だが、そうした取り組みのなかで乱歩は益々疲弊していく。1933年、新たな長篇小説「悪霊」を『新青年』に連載することを企てたものの、構想の破綻や執筆意欲の減退により中絶を余儀なくされるのである（1933年11月から始まった連載は、翌年1月で中絶し、以後、書き継がれることはなかった）。連載を勧めてくれた水谷準に迷惑をかけてしまったことに心を痛めた乱歩は、『貼雑年譜』に「執筆の約束ヲシテカラ一年余、編輯者水谷準君ハ講談社ノヤウニヤイノ／＼ト責メナイダケニ、一層義理ノ悪サヲ感じ、モウノバス訳ニモ行カヌ気持トナツテ無理ニハジメタモノ。ヤハリ駄目デアツタ」と記し、水谷準が『新青年』に書いた乱歩擁護の「編輯後記」を逐一添付している。

こうした低迷期であったにもかかわらず、メディアは相変わらず乱歩を恰好のネタとして利用しようとする。なかでも彼の創作活動を著しく邪魔したのは、本人の意思とは関係のないところで広告塔のように利用されるようになったこと、および、猟奇的な犯罪が起こるたびに事件の背後に探偵小説の影響があるかのように書き立てられたことである。

前者に関しては、1930年11月26日の『報知新聞』に「名士の家庭訪問 文壇人訪問記 死に絵と「死の島」奇怪な装飾品に囲まれて(江戸川乱歩篇)」という記事が掲載されたときの反応などが典型といえる。記事のなかで特定の目薬の商品名を褒めちぎるような書き方がなされていることに憤激した乱歩は、『貼雑年譜』に、わざわざ「探偵小説流行ノ不快ナル余波」と題する文章を挿入し、「アル日大毎広告時代ノ旧友(天人社主トハ別ノ)ガ訪ネテ来テ暫ク話シテ帰ツタト思ツタラ、コンナ広告ガ出タ。探偵作家モ映画俳優ナミニ目薬ノ広告ニ使ハレタノdeal。ソノ後モ屢々色々ノ売薬広告ニ名ヲ出スコトヲタノマレタガ、凡テ嚴重ニ断ツタ。コレニ懲リテ」と記す。誰に読ませるわけでもないはずのスクラップブックに、これだけの怒りを書き付けるとするのは尋常なことではないだろう。

また、1934年の「恐怖王」(『講談倶楽部』6月)綴込予告に対しては、わざわざ「「作者ノ言葉」トイフモノモ、多クハ先方デ勝手ニ作ルノdeal」といったコメントを書き込み、出版社は「「カウイフ広告ヲ出シタノダカラ是ガ非デモ書イテクダサラナケレバ」ト作者ヲ鞭撻スルノdeal」と述べ、誇張した広告をうつことで作者に刺激的な内容の作品を書かせようとする出版社の姑息な狙いを辛辣に批判する。なかでも、講談社のやり方には相当苛立っていたらしく、同年8月には「コノ頃講談社ノ雑誌ナドノ広告ヲ保存スルコトハモウ興味ガナクナツテキタノデ、コノ辺カラ以下コノ貼雑帖モ少シ淋シイノダガ、「中央公論」ノ広告ダケハ、イロ／＼保存シテアツタノデ、コ、ニ皆貼リツケテオク」という悪態をついている。

その頃、探偵作家新人倶楽部という団体が出した『新探偵』(1934年11月20日、編集人・発行人 野島淳介)という小冊子に掲載された、鮫島龍介「乱歩に忠告す!! =起生働與=のことども」という「罵倒文」を読んだ乱歩は、珍しく激高し、わざわざ「コノ小冊子ハ甲賀三郎君ヲ盟主ニ頂ク青年達ノ団体ガ出シタ

モノデ、自然私ノ悪口ナドモノツタワケデアル。(但シ甲賀君ニソソナ大人気ナイ気持ガアツトハ思ハレヌ。子分ドモノナセルコトデアル) 併シ間モナクソノ一団ニ仲間割レガ生ジ、大部分ノモノガ別レテ「探偵文学」ヲ起スニ至ツタ。コノ一団ハ私ヲ盟主トシタイラシク度々来訪ヲ受ケタガ、私ハサウイフ面倒ナコトヲ好マナカツタノデ敬遠シタ。／＼コノ筆者野島君モ後年甲賀君ニ背キ、私ノ所ヘ屢々来テ弟子入りヲ希望シ、甲賀君ノ悪口ヲイロ／＼申述ベルノデアツタ。私ハソノ心情ヲ憎シテ殆ンド取合ハナカツタ」とまで書いてその青年を貶めているが、そうした書きぶりからも精神状態が著しくバランスを書いていたのであろうということが推察できる。

後者に関しては、「「屋根裏の散歩」を地で行く怪盗 空家伝ひに隣家を荒す」という見出しを掲げた『読売新聞』(1937年3月27日)をはじめ、第2巻を通覧するだけで驚くほどの新聞記事がスクラップされている。この記事に対して乱歩は、「私ノ作品流布ノ不快ナル余波」というコメントを付し、「コレハ何モ犯人ガ私ノ小説ヲ真似タノデハナイ、新聞記者ガ私ノ小説ヲヒキアヒニ出シテ読者ノ興味ヲソトツタノニスギナイ」と反論しているが、こちらもよほど腹に据えかねたものだったのであろう。乱歩は基本的に新聞や雑誌に露出することを好む作家であり、メディアとの関係が良好なときには探偵小説の読者を増やすため自ら道化を演じることもあった。だが、1930年代後半の彼は、すでにそうした気力を失くし、「カハル不快ナル挿話ヲ生ズルモ、私ガ余リ通俗物ヲ書キスギルカラデアツタ。講談社モノカラ低俗ナル虚名ガ流布シ、私ノ読者はツマラナイ連中バカリニナツテ行ツタ」と嘆くところまで追いつめられているのである。

やや時間は戻るが、1934年は乱歩が終の棲家となる西池袋三丁目に転居した年である。1935年には『中央公論』(9月)に原稿用紙110枚の力作「石榴」を発表している。そこには、低迷していた乱歩が心機一転を図って作家としての輝きを取り戻そうとする姿がある。1930年代に入ってから講談社の求めに応じて、それこそ自暴自棄的に「孤島の鬼」(『朝日』1928年1月～1930年1月)、「蜘蛛男」(『講談倶楽部』1929年8月～1930年6月)「吸血鬼」(『報知新聞』夕刊、1930年9月30日～1931年3月12日)などの連載読物に手を染めていた乱歩は、その虚名感を逃れることに必死だった⁹。それだけに、「石榴」にかけた思いは尋常ならざるものがあつたはずである。

だが、盟友である西田政治が好意的な批評をしてくれたのを除き、この作品を擁護する声はほとんどなかった。『貼雑年譜』には「「石榴」悪評ノ数々」と題する頁があり、わざわざ自作に対する辛辣な批評だけを並べたうえで、「私ハ既ニシテ私ノ時代ガ去ツテキルコトヲハッキリ感じタノデアル。「石榴」以上ノ何か新シイモノヲ含ンダ作ノ創作慾ガ起ルニアラザレバ、モウ真面目ナモノハ書ケナイ、書ク気ガシナイトイフ考ヘニナツタ。ソコデコレヨリ後ノ数年間ハ、自分ガモウ現役作家デナイコトヲ自覚シ、サウイフ立場カラ探偵小説界ノタメニ何かノ仕事ヲシタイト考ヘ、イサ、カソレヲ実行シタノデアル」と記している。これらの内容は「「石榴」回顧」、「鬼の言葉前後」(『探偵小説十五年』『江戸川乱歩選集』新潮社、1938年9月～1939年8月所収)として活字にもなっているが、自筆で読むとその切迫感はひとしおである。

その直後、乱歩は「此頃ヨリ、体力、気力、運命、共ニ下リ坂ニ向フ」などと記すようになる。新しい作品は書けないのに、新たな読者の期待だけは膨らみ、ときには、まるで乱歩自身が怪奇的人間であるかのように書き立てる記事も現れる。『芸術新聞』(1935年2月9日)が「流石は江戸川君 自ら怪奇の人となつて雑誌記者W君を感嘆さす」という見出しで出鱈目の記事を書いたことに対して、乱歩は「コノ記事

ハ全クデタラメノ作り話デアル。ムロン不快デアルガ、一方又カウイフ噂ガ諸方ニ書カレ、私^マの本ノ売行キヲヨクシタコトモ争ヘナイ。今更ライフノデハナイガ、私ハ全クノイカモノ見世物芸人トナリ果テタワケデアル」と述べ、複雑な心境を吐露しているが、このあと彼がわざわざ『貼雑年譜』の余白に大きな文字で「又シテモコノ不快記事小説廃業ヲ思フコトシキリ也」と記していることは記憶しておきたい。

だが、第2巻の中盤になると、1935年前後の記憶といま『貼雑年譜』を制作している時代の空気感が入り混じるようになる。その頃から暗黒の時代がはじまり、いまに至っていることをあらためて確認するような書き方がなされるようになる。たとえば、「探偵小説にかぶれ脅迫状を乱発 少年ギャング捕はる」(『国民新聞』1935年2月1日)、「少年が猟奇の夢 軒並に脅迫状 探偵小説『魔術師』を実演(『読売新聞』同年2月1日)、「探偵小説から生れた殺人魔 日頃耽読の『乱歩』を地でゆく 鶴野洲・大罪の告白」(『東京朝日新聞』同年11月23日)といった新聞記事を切り抜いた乱歩は、一方で、凶悪な事件の背後に探偵小説からの影響があるかのような書きぶりに抵抗を覚えつつ、もう一方では、こうした猟奇的な文言を用いることを許されていた時代であったことに感慨を抱き、「今ノ全体主義ノ考ヘ方カラスレバ、コンナ記事ガ頻繁ニ出タラ、執筆サヘモ禁ジラレタデアラウガ、当時ハ内務省モ警視庁モマダ自由主義的ナ考ヘ方ヲシテキタノデ、本ノ発売ヲ禁ジラレルコトモナカツタ」と書いている。「全体主義」という言葉を用いることで、1935年と執筆時の「今」(『貼雑年譜』の起筆は1941年4月。第2巻も戦時下に書かれていることは間違いないが、具体的な執筆時期は不詳—筆者注)とでは世相がまったく違ってしまったこと、内務省や警視庁の言論統制が厳しさを増しつつあることを婉曲に批判している。

同じことは別の頁にある「昭和十一年度(二・二六事件ノ年)」と題された文章にもいえる。ここで乱歩は「二・二六事件起リ自由主義個人主義没落ノ前兆既ニ歴然タリ。唯美主義ノ如キハ消エテナクナルベキ時代ガハジマツタ」という一節を挿入し、1936年の二・二六事件をファシズムの時代のはじまりと考えているのである。

7 戦時下の乱歩

第3巻(1936年～1945年5月の戦時下資料)は戦時体制下の生活を記録した内容となっている。1938年に国家総動員法が制定されて以降、日本の言論界は刻々と弾圧が強まっていく。1940年に中央政府機関として内閣情報局が置かれてからは、新聞紙等掲載制限令(1941年1月16日)、国防保安法(1941年5月10日)、言論・出版・集会・結社等臨時取締法(1941年12月21日)が施行され、戦争協力の立場を取らなければ文章を發表することが難しい時代に突入する。治安維持法に関しても更なる改正がなされ、「国体ノ変革」をもくろむ「組織ヲ準備スルコト」それ自体が処罰の対象となる。「罪ヲ犯スノ虞アルコト顕著」なる者に対しては予防拘禁も可能になる。

こうして、戦争末期の日本において自由にものを書くことは不可能になる。多くの作家は政治的・思想的な話題を回避し、当局に睨まれないように怯えながら文筆活動を継続するしかなくなる。なかには国策に対して積極的に協力し戦争のプロパガンダとなっていく書き手もいるし、固く沈黙を貫く書き手もいた

が、多くの作家は自主規制というかたちで話題を慎重に選び、当局の顔色を窺いながら細々と原稿執筆の機会を求めた。

1940年12月に内閣情報局の統制下で社団法人日本出版文化協会が設立され、翌1941年6月には出版用紙配給割当規程が実施される。1942年4月からはすべての出版企画を対象に発行承認制が実施されるようになり、発行書籍の奥付には「出文協承認番号」の記載が義務づけられる。戦争末期の日本では同協会の査定に合格しなければ紙の配給が受けられない状況になる。印刷用紙の欠乏によって出版物の量は著しく減少し、新刊書は発売当日に売切れるありさまとなる。

こうした時局の変化に関して、乱歩は『探偵小説四十年』（桃源社、1961年7月）のなかで執拗に記述している。たとえば、検閲と旧筆宣言の経緯についても、

当時は事前検閲の制度があって、内務省だったか警視庁だったかに、原稿又はゲラ刷りを提出すると、風紀上面白くない個所に赤線を引いて返される。出版者はそれを作者に届けて、その個所の書き替えを頼むという慣わしであった。／ところが、私の場合〔新潮社版選集の刊行に際しての検閲を指す ※筆者注〕は一行や二行ではない。一頁二頁にわたって、全文書き替えを命じられる。その検閲は既に組版を終ったゲラ刷りで受けていたものだから、赤線の個所を削除すると、そのあとを全部組み替えなければならないので、赤線の行数に合わせて、別の文章を書かなければならない。それで、一応は元の意味と似た穏やかな文章を書いて渡すのだが、二三日すると、又戻って来る。同じ意味では困る、全く別の意味のさしきわりのない文章にしてくれ。「今日はお天気がいい」というような無意味な文章にしてくれというのである。それでは前後が続かないので、そんな無茶なことを注文されるのなら、選集の続刊をよしてしまおうと、私も怒ったが、新潮社が「まあまあ」というので、仕方なく、まるで前後のつづかない文章を書いて、やっと検閲を通過したことが、殆んど毎巻であった。

と回顧している。また、1940年1月7日の日記（引用は『探偵小説四十年』前出）では、自身が内務省から危険人物と看做されていたことに言及し、「検閲者の気持はよくわかっているので、その検閲方針に従って、自作を見渡して見ると、厳密に言えば一作として無難なものはなく、検閲者の気持をくむとすれば、旧作全部を絶版にすべきであるが、それも余り際立つこと故、さし当り最も反時局的と考えられる左の文庫本を、自から進んで絶版に附した」と述べている。1939年3月に「芋虫」が反戦的と判断され、警視庁検閲課によって作品集からの全面削除（のち発禁処分）を命じられて以来、乱歩の作品は1941年度までにほぼすべての作品が発禁となる。すでに出版されていた書籍も全作絶版とされ印税収入は皆無となる。困窮した乱歩は、止むなく「筆名を変えて、健全な教育的な読みものを書いて見ませんか」という講談社編集担当の奨めに応じ、『少年倶楽部』に少年物を書く決意をする。それまでの作家生活において一度も編集者から書き直しをさせられたことがなかった乱歩は、甘んじてそれに従うのである。

第3巻の特徴のひとつは、「池袋丸山会々員名簿」「豊島区池袋三丁目丸山町会防空費寄付者誌名並に寄附金明細」「東京出勤将士後援会寄付者氏名並に金高」「丸山町会職員」「丸山町会会員電話番号表」「池袋三丁目町会役員表／隣組長表」「帝都豊島区翼賛壮年団役員名簿」「区市群島団報道主任名簿」「帝都翼壮第

一生活委員名簿」「町会隣組運営座談会出席者名簿」「帝都翼壮豊島区中部第十五分団 應徴士座談会出席御芳名／区市群島団報道主任名簿」「豊島区国民義勇隊役員名簿」「池袋三丁目町会役員表」などの名簿が多数貼付されており、町内会や隣組の役割がよくわかることである。もちろん、名簿には「平井太郎」の名も記されており、戦時下の乱歩の足跡を考えるうえで極めて貴重な資料となっている。

名簿とともに多くの頁を割いているのが回報、通知、お願い文などのビラやチラシである。「東京市隣組回報」「国民精神総動員隣組回報」「東京市隣組回報」「豊島区隣組回報」「菓子配給開始御通知」「豊島区隣組回報」「皇国文化協会第一分科会通知」「十二月分国債貯金について御願ひ」「簡易貯水池築造勤労奉仕の願ひ」「月例防空訓練日時決定」「防護監視制度改正につき急告」「燈火管制訓練を行ひます」「急告 〆 日夜の燈火管制訓練は天候の都合により中止となりました」「蔬菜配達制に就て」「退避訓練を行ふ」「「コーライト」を御頒け致します」「至急回覧」「至急回覧 罹災者に応急米配給」「緊急町会常会開催御通知」「焼跡清掃勤労奉仕に就て」「緊急町会常会開催御通知」といったビラやチラシはきちんと年代順に配置されているため、1940年から1945年に至る過程で東京の防空体制がどのように変化していったのか、隣組がどのように組織されどのような取り組みがなされていたのか、食糧増産や献納運動の実態などが詳細に記録されている。回報の多くは各戸別の捺印欄があり、全戸が内容を確認したあと隣組の班長がそれを確認する仕組みになっている。こうしたビラやチラシは一般的な印刷物と違い限られた地域にしか配られていないため、それがまとまったかたちで保存されているというのは非常に稀有だといえるだろう。

その他、貼付されたビラやチラシには、門松の廃止、砂糖、果物、マッチなどの切符制導入、節米の訴え、鉄や銅の献納運動、家庭用パン特別購入権の増発、勤労奉仕の願ひ、防空退避所点検など、当時の人々の生活実態が浮き彫りになる貴重資料が数多くある。空襲が頻繁に行われるようになると、防毒マスクの到着案内、瓦斯設備の撤去案内、寄付金や国債割当の一覧表、代用食の作り方と食べ方、帝都疎開に伴ふ地方転出証明書、交通と罹災者の汽車乗車証明書、空襲罹災者に対する医療切符などが貼られ、より切迫感が増してくる。1943年の年末頃になると防空訓練や焼夷弾防護訓練が日常的に行われるようになり、地域の防空指導員、防空班及指導係員、大政翼賛会豊島区支部常務委員¹⁰などを委嘱されていた乱歩は、池袋三丁目北町周辺の住民を統率するための様々な工夫を凝らす。「丸山町会区地域図」「池袋丸山町会第十六組防空設備概略図」「東京帝国大学構内建物配置図」「丸山町会区域地図」「池袋三丁目北町会警報伝達系統図」「池袋三丁目北町全図／池袋三丁目北町隣組区域図」といった地域図、概略図、系統図を手書きで作成して地域住民の結束を強めようとするのである。

さきにも述べたように、当時の乱歩は、それまでの旧作すべてが絶版となっており、探偵小説に対する厳しい言論統制によって新作を執筆する機会も与えられていなかった¹¹。収入が途絶えたことで生活は行き詰まり精神的にも体力的にも疲弊していた。名古屋の探偵小説研究者・井上良夫との往復書簡で探偵小説について語り合うのを数少ない愉しみとし、講談社系雑誌の特派員として軍需工場や足尾銅山を視察したり、時局におもねるかのように雑誌『日の出』に科学スパイ小説『偉大なる夢』¹²を連載して糊口をしのぐ日々だった。町内会の構成員のなかに起こる意見の対立やトラブルにも対処しなければならなかった。また、この時期には長男・隆太郎の海兵団入営も重なっており、心労は増すばかりだったと思われる。『貼雑年譜』には、隆太郎が入営に際して送ってきた挨拶状が大切に貼り付けられているが、そこに何のこ

ントも書かれていないところに、むしろ乱歩の衰弱が感じられる。

乱歩自身の活動に関連する記事としては、「小林前台湾総督を囲む夜語り 晩餐会」（1942年7月17日）において、「スパイ防諜奇聞」の題で講演を行った記録、「野村駐米大使を慰労する会」（1942年10月15日）への出席記録に続き、「皇国文化協会第一分科会」（1943年10月25日、大東亜会館）、「日本文学報国会小説部会第二回総会開催通知・小説部会決戦総会式次第」が貼付されている。前者には江戸川乱歩をはじめ、諏訪三郎、鷺尾雨工、角田喜久雄、長谷川幸延、長田幹彦、山岡荘八、細田民樹などの作家が名を連ねているし、後者には、日本文学報国会小説部会長だった正宗白鳥の他、白井喬二、久米正雄、中村武羅夫、戸川貞雄、片岡鐵兵が挨拶または報告者として登壇している。

さらに、第3巻の後半には防空指導に携わる立場で乱歩が談話などを寄せている新聞記事が切り抜かれている。「豊島分団入魂授与式」（『帝都翼壯』1944年3月15日）、「妙手を待つ 配給事務を簡素に」（『読売報知』1944年7月25日）、「期待は「量」と「熟練」に 混雑もあつた総合配給制第一日」（『読売報知』1944年8月16日）、「將軍邸を作業場 全町民が参加する隣組工場」（『読売報知』1944年10月12日）、「わが家の防空戦術」（『読売新聞』1945年1月3日）、「資材は各戸分散 塀には潜り戸 消火は隣組共同で」（『東京新聞』1945年1月7日）、「ラジオはもっと面白くならぬか」（『朝日新聞』1945年1月23日）などである。

なかでも興味深いのは、『東京新聞』（1944年12月11日）の「空襲と空家」という特集記事に寄せた「強制的命令へ 政府当局の断を待つ」である。ここで乱歩は、「昼間は勤めに出てゐる様な人達に対し、勤務先で合宿所を作るべきだ。合宿へ入つて自分の家をあげ、他の適当な勤労者に住む様にさせるのが空家をなくする一番良い方法であると思ふ」「全然空家の場合は当然隣組が鍵をあづかるのが最善の方法と思つて、これも大いに勤めるが、この場合も大家さんに命令する権利は我々に無いから、簡単には事が運ばない、先日防空総本部へ行つて意見を述べておいたが、結局は政府が強制的に命令を発して空家問題を解決する他に方法は無いと思ふ」などと指摘している。

そうしたなか、1945年4月13日に東京西北部一帯が空襲を受け豊島区域の約7割が焼失する（死者778人、負傷者2,533人、焼失家屋約34,000戸、罹災者161,661人）。さいわい、隣接する立教大学と乱歩の自宅は延焼を免れるが、のちに城北大空襲とよばれるこの空襲で隣組は機能不全に陥る。同年6月には乱歩自身も東京に留まることが難しくなり、すでに福島県保原町で疎開生活を送っていた家族のもとへと旅立つ。第3巻には乱歩が福島にいる母と妻・隆に届けた書簡が数多く通貼付されているが、最初の書簡の末尾には「電灯、電ワ、ラジオ、断水多し凡て不通ナリ」と記されており、最後の書簡には土蔵や自宅に焼夷弾が降ってきた様子が図解で報告されている。乱歩は、空襲により切迫しつつある状況を克明に報告することで精神を安定させようとしているように見える。

このとき乱歩が何より気にかけていたのは収集した貴重書をどのようにして護るかということだった。『貼雑年譜』に貼り付けられた「貨物受取証」（1945年6月23日）、「運賃諸掛請求書」（1945年6月25日）を見ると、このとき乱歩は書籍を158箱疎開させ13,470円を支払っている。戦争末期の混乱状況のなかでの貨物であるため、この金額を安易に現在の相場に置き換えることはできないが、たとえば、1945年当時の上野―青森間鉄道旅客運賃が20円だったことを考えると、この金額がいかに莫大なものだったかが

わかるだろう。

さらに、第3巻には翼壮理事審議室主任・四元義隆による「国民義勇隊の構想」(『朝日新聞』1945年3月22日)という記事が貼付され、乱歩自身によって重要箇所マークが施されている。国民の「自発的な憂国運動」として正規の軍隊とは別に「国民義勇軍」を設立する必要があると訴えるこの記事の後半には、「本土作戦といふが如き秋には高齢の名士であれ、学者であれ、文人であれ、悉くが剣を^{ひつき}提げ一兵士としての戦死を覚悟すべきである。最後の段階においては、政治家も学者も芸術家もたゞ一本の剣に全生命をうちこんで戦ふ義勇隊の一兵士たるべきである」、「義勇隊は狙撃、爆破、斬込等に関する簡易なる訓練を受け、なほ兵站勤務、民衆指導等に関しては必ずや有力なる任務を果すべきものとして準備されねばならぬ。敵空軍が如何に鉄道橋梁道路を破碎しようとも、数百万数千万の義勇隊の存する限り第一線への補給は微動だもせぬ。こゝに本土作戦の強みが厳存する」とあり、乱歩はこの主張に強い示唆を受けたものと思われる。コメント等の記述がないためこのマークの意味は定かでないが、少なくとも、この煽動的な言説に乱歩の心を揺さぶるものがあつたことは確かであろう。

※本稿は、拙稿「活字との密約——『貼雑年譜』に見る乱歩の雑誌偏愛——」(『立教大学日本文学』第127号、2022年3月)と一部の内容が重複していることをお断りしておく。また、本稿の一部が共編者である後藤隆基の解題「江戸川乱歩『貼雑年譜』の成立と継承」と重複するが、それぞれ文脈上必要と考へての記述であるためご容赦いただきたい。

¹ 江戸川乱歩は生涯において45回の引っ越しをした。1912年に早稲田大学予科に入学してからでさえ東京、大阪を何度も行き来し転居を繰り返している。そうしたなか、彼が最後に辿り着いたのが西池袋三丁目の立教大学に隣接する場所だった。1934年7月、同地に転居した乱歩は戦争末期に福島県保原町に疎開した時期を除き、1965年に亡くなるまでの31年間を同地で過ごす。

² 乱歩は『貼雑年譜』に添付した「経済学への関心」という備忘記のなかで、「ダーウキンノ進化論ニ感動シクロボトキンノ「相互扶助論」ヲ愛読シ、マルサスノ「人口論」ニ関心ヲ持ツタ。私ノ時代ハマルクス流行ヨリハ少シ早カツタノデ、最モ影響ヲ受ケタ本ハ何カト云ヘバ結局ダーウキンデアツタ。ツマリ育チトシテ自由主義者ダツタワケデアル」と記している。

³ 乱歩は「競争進化論」のテーマで大学の卒業論文を書き、さらにその内容を踏まえて『工人』(1922年1月)に同タイトルの論説を掲載している。だが、結果としてこの論考は途中までしか掲載されなかった。乱歩が「大学時代」というタイトルを付して反古文をまとめた袋には同論の草稿が残されているが、なぜこの論考が未完のままとなつてしまつたのかは今後の研究課題である。

⁴ 『日和』編輯時代の乱歩については浜田雄介が「江戸川乱歩と進化論」(石川巧・落合教幸・金子明雄、川崎賢子編『江戸川乱歩新世紀 越境する探偵小説』ひつじ書房、2019年2月)のなかで詳述している。

⁵ 『日和』第三号(廃刊号、1919年5月12日)には幹事・小野八十一による「日和会解散に就て」という一文が掲載され、「文芸部に於ては雑誌「日和」を発刊し智識の交換徳育の涵養に努め第一第二を発行し

今後益其目的に向て邁進せんとする時大野氏の静養高山氏の逝去に相継ぎ雑誌編輯に尽瘁せる平井氏の退職を見茲に大打撃を受けたり」と記されている。

⁶ 高島真『追跡『東京パック』 下田憲一郎と風刺漫画の時代』（無明舎出版、2001年1月）に拠れば、「明治三十八年に北沢楽天が創刊した風刺漫画雑誌。明治四十五年に楽天が手を引いた後の第二次「東京パック」は大正四年に休刊するが、大正八年八月に第三次「東京パック」が復刊されて大正十二年まで発行されて休刊。第四次「東京パック」は昭和三年七月に発行されて昭和十六年まで続いた。乱歩が編集に携わったのは大正八年第二号（九月号）から第四号（十一月号）までであった」。

⁷ 『貼雑年譜』には井上勝喜の名前がしばしば登場し、智的小説刊行会の立ちあげ（1920年5月）に協力してもらっていたことがわかるが、それ以上に重要なのは探偵小説に関する井上勝喜との遣り取りが「二銭銅貨」の筋につながっていること、井上勝喜が実際の「二銭銅貨」のモデルにも採用されていることである。乱歩は『貼雑年譜』に「探偵小説 二銭銅貨ノ立案（二十七才）」という備忘録を書き、「井上勝喜君が三人書房へ来テ以来、イロクノ事ヲシテ来タ合間合間ニハ、主トシテ探偵小説ヲ愛読シタリ、オ互ニ探偵小説ノ筋ヲ考ヘテ話シ合ツタリスルコトヲ樂シンデキタガ、社会局勤務中又ソノ熱が高ジテ、九年五月ニハ後年「新青年」ニ発表シタ「二銭銅貨」ト「一枚ノ切符」ノ筋ヲ考ヘ、ソノ梗概ヲ巻紙ニ書イテオイタモノガ今デモ EXTRAORDINARY ノ袋ノ中ニ残ツテキル」と記している。

⁸ 「よみうり抄」（『読売新聞』彙報欄）によれば、馬場孤蝶は1922年7月22日か23日に四国、関西方面での講演旅行に旅立ち、9月25日に帰京している。神戸図書館での公演は恐らくこのときに行われたものだろう。また、馬場孤蝶は「私の最近読んだ＝冒険小説三百種」（『読売新聞』月曜附録、1921年8月14日）で、それまでに自身が読破したブレック叢書、ボーイス・フレンド・ライブラリイ叢書、ナゲット・フレンド・ライブラリイ叢書などの探偵小説について知識を披見したうえで、「念の爲めに断つて置くが博文館から出るそれ等の訳本の翻訳者は僕では決して無い。従来世評では、僕の訳文でありさへし無ければことごとく名訳であるといふことになつて居るらしくも思はれる。されば、博文館出版の前掲の訳本は僕の手にならざるものであるのだから、読者は非常な名訳として安心して講読せられて宜しい訳である」などと述べている。神戸図書館での講演内容も恐らくそれに類した内容だったと推察される。

⁹ 松本清張は「解説」（『日本推理小説大系 第二巻 江戸川乱歩集』東都書房、1960年4月）のなかで、「乱歩の声名は、いわゆる百万人の読者に喧伝されたが、彼の最初の作品にみる独自性や野心的なものは、残念ながらこの辺りから影を潜めた。（中略）乱歩はこの方面に大いに活躍し、また、押しも押されぬ大作家にのし上がったが、彼自身の中に巣食っている作品に対する絶望感、虚無感は、いつまでも拭いきれず、作品価値的には遂に長い空白時代が続き、これが終戦後にまで互ったのである」と書いている。

¹⁰ 『貼雑年譜』には大政翼賛会総裁東條英機の名前で発せられた委嘱状（日付は「昭和十八年八月二十八日」）が貼り付けられている。

¹¹ 戦争末期における乱歩の動向については、拙稿「江戸川乱歩所蔵本・海軍外郭団体雑誌『くろがね』を読む」（石川巧、落合教幸・金子明雄・川崎賢子編著『江戸川乱歩新世紀 越境する探偵小説』ひつじ書房、2019年2月）、ならびに、拙編著『海軍外郭団体雑誌『くろがね』復刻版 附解題、総目次』（金沢文圃閣、2018年11月）を参照していただきたい。

¹² 『偉大なる夢』は、1939年3月に警視庁検閲課から「芋虫」の全文削除を命じられたあと、細々と通俗小説や少年読物の執筆を続け、時局の悪化にともなって小松龍之介名義の子ども向け啓蒙小説シリーズを書くようになっていた乱歩が、唯一「江戸川乱歩」の筆名で発表できた作品である。画期的な軍用飛行機エンジンの開発やスパイの暗躍を描くこの作品は、もちろん、表面上は国策小説の貌をもつが、内容的には乱歩が精魂込めて書いた空想科学小説として価値の高いものであり、今後の研究が俟たれる。